三保通信

２４．５．１

〒424-0401
（株）三保製薬研究所
静岡市清水区中河内一五一三
☎０５４-３９６-３３２１

「海」「母」と書いて、「うみ」は「生み」に通ずると、、それを古代人はもっと生き生きと知っていたであろう。（『海・呼吸・古代形象』三木成夫著・うぶすな書院）

「生み」に通ずるとは頭では解っていても〝生みのいのち〟を生き生きと知っているかと言えば、古代人ほどには、、と言うのだろうか。著者はこうも言うのだ。

「われわれが本来の〝いのち〟というものに目覚めるためには〝いのち〟のつながりにたいする〝憧れ〟と申しますか、〝郷愁〟と申しますか、その根強さによるよりないのです。」

花見はここで何と云うのだろう。

「あなたは、生き生きとしているかって、、う～ん？」

「〝いのち〟のつながり？」

「〝憧れ〟、〝郷愁〟、、考えたことないなぁ、、」

と云うのだろうか。

花見氏

☞〝あたま〟の独走、、☜

「古代人、？　なぜ？」

著者は「〝憧れ〟とか〝郷愁〟といったものが〝いのち〟に目覚めさせると言うのだが、我々は〝憧れ〟とか〝郷愁〟それ自体が何か分からなくなっていないだろうか、、。ところが著者は、その〝憧れ〟とか〝郷愁〟の根強さによるよりないというのだ。

この「根強さ」がどの程度なのかという程度如何を言っていると思いきや著者は、

「人間がこの離れた自然の大地に再びしっかりと足をおろすことが出来るのか？」にかかっていると語る。

花見でさえ、

「それ、無理でしょ?!」

と云うだろう。

ただ、著者も言っている。〝憧れ〟とか〝郷愁〟というのは〝こころ〟で感じることで、人間の〝いのち〟に対する態度であって、現実は、「そこにあるのは、ただ〝あたま〟の独走だけである」

と。

その独走を止めるには、〝いのち〟に聞く、、いや、聴くということだろうか。そうすると、「大地にしっかりと足を、」は、〝いのちに聴く〟と同義で、花見にして

「、もう少しからだの命に聴けってこと？」と云う。

（H）

生命・想い・こころ

Asuke亜紀

「絵の心」(八)

〝時〟は巡りて…

今年は様々な出来事のニュースで年が明けた。元日の能登半島地震は日本中を震撼させ、厳冬期の大惨事に傷心の日々を送っていたが、時は巡り、筆者が住む多摩川辺りにも桜の花が開花し、新しいいのちが輝き始めた。木立に入って見上げると、木漏れ日と戯れる桜のはなびらから光の漣が降り注ぐ…。

不意に、高校生時代を過ごした母校の庭に屹立する大樹の桜が想起された。遠い過去の風景が突然湧き上がってくることがある。

二月に入った訃報のニュースが、喚起させたのだろうか…。

日常の時の刻みに亀裂が入ったような痛みを覚えながら、小澤征爾氏が逝去なされた知らせを受けた。

大先輩であり、ある意味で音楽の師とも言える小澤氏との永訣は、時代の大きなうねりの渦で、遥かなる記憶を呼び起こすものだった…。

筆者の学生時代、小澤氏はすでに国内外で活躍していたが、名教授や先輩たちによって築かれた厳しいなかにも自由な校風は、そのまま息づいていて、恩師齋藤秀雄先生も、晩年の車椅子のお姿ながら、熱意溢れる指導に気迫に満ちたお声を響かせていた。学生に対するというより、常に丸ごと人間としての〝個〟と向き合う、真剣勝負のようなレッスンが展開されていたように思われる。「ラグビー少年」だった小澤氏も、溌剌とした伸びやかな身体性を更に開花させ、緻密で厳格な指揮法を、何より芸術としての神髄、豊かな創造性を育まれたのであろう…。

〝個〟と対峙しつつ、大編成のオーケストラの響きのバランスのもとに生気に満ちた芸術作品を創り出す情熱は、そのまま小澤氏の血肉となり、実に「世界のマエストロ」としての小澤氏独自の音楽が生み出されたのではないだろうか。

一九九二年、ウイーンフィルの定期演奏会。小澤氏の指揮で演奏された「ドヴォルザークの交響曲8番」を聴いた時は特別の感動を覚えた。

新鮮な、同時に重厚なオーケストラの響きと、その流麗な旋律の流れに全身を貫かれた高揚感は今も蘇ってくる。日本人としての意識が消され、まさしく「世界の小澤」を体感した瞬間であったような気がする…。

(3面上段へ)

常に全力、演奏家と強い絆

24.4.12 日経夕刊

ものすごい情報量が詰まっていた」と矢部さんは話す。特に「絶対テンポ感」ともいえるリズムの正確さは、他の追随を許さなかったという。

そしていつも全力投球。著名チェロ奏者のロストロポーヴィチらと雑魚寝しながら日本の地方を巡る「キャラバン・コンサート」では「朝5時の年、彼かさんの を見守っ 出すよう ーケスト 澤さん、 寛、神澤 者として …。

長く音楽監督を務めたボストン交響楽団のラストコンサート（2002年4月、米ボストンで）＝AP

（2面下段より）ウイーンフィルの伝統に、新しい風が溶け込み、躍動感あふれる希望に満ちた「新たな音楽」の誕生と言ってもよいのではないだろうか。

一九七三年から、ボストン交響楽団の音楽監督を29年務めたが、この長い期間は最長とのことである。常に一貫して勉強熱心な指揮者であったと言われるが、その偉業は燦（きら）めく軌跡を示し続けることだろう。

人の記憶は、私たちの意識の底で生き続けている…。

そして、あの世へと旅立ってしまった人々との対話を深めることが出来ることも、ホモ・サピエンスの人間に与えられた特権ではないだろうか。先人たち、歴史上の偉人たちの〝生〟からのメッセージ、示唆に耳を傾けたい…。

時は巡り、又新たな季節を迎える。国際情勢も更に暗転しそうな雲行きの日々が続いている。迫り来るような危機感を感じざるを得ない昨今であるが、希望を孕（はら）んだ明日を迎えたい…。

〝今〟というときを皆様と共に共有できるよろこびに深い謝意を噛みしめながら…。

―心からの感謝と共に。

―風に似て
吹きわたりくる声を聴け
静寂（せいじゃく）からつくられる
絶ゆることのないあの音信（おとずれ）を。
あれこそあの若い死者たちから来る
おまえへの呼びかけだ。

（『ドゥイノの悲歌』リルケ）

もう一度

春の空が、八ヶ岳の上に広がっています。庭には、水仙が咲き広がり杏（あんず）の枝も満開です。次々に花が咲いて、うれしい春です。田んぼの畦（あぜ）のせせらぎも、さらさらと流れ始め、農作業も始まりました。忙しくなります。

毎年受けている人間ドックの結果が届いて、…なんと、要精検!!

36才で、難病になり、甲田先生、西本先生、宇津野先生、多勢の皆さんのお世話になり、元気で、今、76才。心新たに、もう一度、頑張らなければなりません。このところ気持ちに、ゆるみがあったのも事実です。スイマグと青汁と温冷浴と裸体操……。頑張ります。

シリーズ・新「〝三保〟の意味」(2)

〝究極のリスト〟に励まされて

シリーズとまでして「今、書いておかなければと、、」と、多少はやる気持ちで、始めたのですが、もう一度原点を見つめ直すという意味なのです。〝三保(みほ)〟に意味を込めているわけですがその原点とするものが希薄になっていないかと危ぶむ、我ながらそう思うわけです。

通信を発行させて頂いて昨年で40年、そして今年41年目に入っているのですが、これも講読して頂いてこそなのです。ときにお読み頂いている皆様の中からお葉書・お手紙を頂戴して、その都度やはり発行の意味を問い続けなければという思いです。

「発行」させて頂くことと〝三保〟の問い直しはわたしの中で繋がっているといいますか切って切れないことになっていますことご理解願えればと思います。

創業70年の昨年、こちらも節目の年でしたが、後継の者として創業者の心魂には叶わない継続者の〝悩み〟と申しましょうか、「継続の力とは、」と問い直し続けているわけです。

継続後の、その契機となりました一つが、〝究極のリスト〟という新聞記事の見出しでした。

この記事は日経紙2015年9月19日、『医出づる国』シリーズのテーマ《最優先の治療決めるのは私》の中の見出しの一つで、ここにその記事の一部を引用させて頂きます。

海外には究極ともいえる住民参加の事例がある。

米オレゴン州では公的な医療保険の財源をどのような病気や医療行為に優先的に配分すべきかを住民の意見を踏まえて決める。当局が費用効果などに基づいてつくった優先順位リストを住民の声で修正する。

その結果、今年の最も優先順位が高い分野は「妊娠」となった。「出産」「予防」が続く。いずれも日本では公的保険の対象とならない分野だ。

「住民の意見を踏まえて決めるというのも「えっ、」「スゴイ!」と思うのが正直なところでした。そしてその〝住民の声〟は、三番目が〝予防〟だったということです。

〝予防〟ということがいかに難しいか思う日々ですが、「オレゴンの基準では日本の医療費のうち5兆円が公的保険の対象外になる」(濃沼教授)と言います。要するに、オレゴンの住民の選んだ公的保険の対象は日本のその実態とは(5面上段へ)

（4面下段より）ほとんど真逆といっていいのです。

医療費に関して、オレゴンの先進性は、日本の後進性を否が応でも考えさせるのです。

医療の先進性は予防に有り。〝三保、、〟の三は、正四面体という立体を頂点側から見ますと▽三角に観えます。この▽の立体は正四面体で、最小体積にして最大強度という〝究極の立体〟であると考えているのです。〝究極の立体〟を目指す身体性の保持を皆様と共に願っているのです。

実はここで一つ付け加えて置きたいのです。三は三で終わらないのです。〝究極の立体〟とは言いましたが、だからこそこれに内接、外接しうるのは球だ、ということです。これについてはまた紙面を変えて書かせてもらいたいと思っています。（H）

一面巻頭文の〈古代〉のご理解の参考に！

「古代人はもっと生き生きと、、」というように書いて、それではこの〈古代〉とはいつのこと、もっと言えば何のこと、を書いていないものですから少しご説明させて頂きたいと思いました。

グーグル調べですが、「古代人」は、

中世より前だが原始時代よりも後の時期である「古代」に生きていた人のことを指します。古代は、日本史では奈良・平安時代をさすことが多く、世界史では原始社会のあとの奴隷制社会をさします。

と説明されています。三木成夫著『海・呼吸・古代形象』では、「古生物学」の世界での古代のようです。生物の古文書学といえるもの、、と。

今日までの古生物学によれば、人類をふくむ脊椎動物の祖先は、地球の古生代、今を去る数億年の昔、当時の海底に、はじめてその姿を現したという。現在の魚類とは、著しく形態を異にした、この原始の脊椎動物は、やがて古代魚類に進化を遂げながら、その一部は、棲み慣れた故郷の海の水を離れて、まったく未知の、淡水の世界へ移っていったという。この新しい環境の適応にみごとな成功を収めたかれらは、ここから、さらに新天地を求め、ついに、それまでの水の生活を捨て去り、古生代も終わりに近い、石炭紀の〝古代緑地〟に上陸を敢行する。（H）

『腹の健康』第七章精神一
『月刊西医学』一九八一・5月号
からの転載です。（H）

腹の健康

西勝造

活動力は人体の細胞や組織に、活動を伝える活動神経に基づくのである。このようにして人間は、ある時間の間は、一定の量の精力を発散することが出来るのである。人体の精力の消費は、制限作用を有する神経によって、調節されている。言葉を代えていえば、一組の神経は、活動力を供給し、他の神経は、それにブレーキをかけるのである。

心臓の筋肉は、ある種の神経から活動力を付与されていることは事実である。しかるに一方、肺と胃との神経は制限作用を有しているのである。

人体の制限作用をなお強めるものは、種々な排泄物である。例えば、糞便や尿や汗、ガスその他の体毒である。体内に残されるとすれば、いつかしら、これらの毒素は頭脳や神経をマヒさせる。そこで疲労が生じ、姿勢が崩れ、脊髄神経は椎間孔で圧迫され、その関係神経器官の働きが鈍る。さらに、腸マヒに陥り、宿便停滞となり、食物の残滓物は堆積する、その位置により、いずれかの器官に二次的に障害を及ぼすことは、その人の日常の起居動作、環境や意志作用によってその影響の軽重大小の異なることはもち論である。そしてついには睡眠の欲望が生ずるのである。

これらの作用によって、人間の生活は律動的になるのである。そして我々は交互に目をさましたり、眠ったりするのである。なお、これが範囲を拡げては、夜となり、昼となり、暗黒となり、光明となるのである。そして良き暗示を受け、悪しき指示を受け、遺伝の霊魂に教育が施され、我々の道徳方面においても、肉体方面におけると同様の性質が知らず識らずの間に培われてゆく。

子どもの健やかな成長を願う鯉のぼり。
「スイマグを飲んで元気に育て！」と合わせて頂いておりました。
ゆみごんイラスト

あとがき

予防を、悪くならないために、困らないためにするものと考える方は多いでしょう。ことわざにすると、「転ばぬ先の杖」と言えるかもしれません。

しかし本当に望まれる予防は、「今よりももっともっと良くなる、そのための準備」では無いでしょうか。

杖なんて重たいものは捨てて、スーパーマンになって飛んでいく、そうなれば最高ですね。（Y）